

かずら橋を次世代へ

受け継がれる伝統の技 かずら橋3年に1度の架け替え



▲架け替え作業に取り組むかずら橋保勝会と台湾から見学に訪れた観光客



架け替えに秘められた先人の知恵と技術の継承

日本三奇橋の1つに数えられる西祖谷山村のかずら橋は、シラクチカスラ（サルナシ）のかずらを編んで架け替えられた橋で、国の重要有形民俗文化財に指定されています。長さ約45㍎、幅約2㍎、水面からの高さ約14㍎に架かります。かずら橋は、年間多くの観

光客が訪れ、老朽化が早いことから、3年に1度、かずら橋保勝会によって架け替えが行われています。

架け替え作業は、かずらが水を吸い終わる秋以降、かずら橋保勝会が約6㍎のかずらを調達し、雲網と呼ばれる部分を先に編み上げ、残り部分は1月中旬〜2月にかけて現場で編み上げて架け替えており、伝統の技の継承を行っています。

かずら橋の架け替え

1 かずらの採取

11月中旬より、徳島県および高知県の山奥の採集地に入り、約20日間かけて直径2㍎以上、長さ5〜10㍎のかずらを約6㍎集めます。



2 かずらの運び出し

採取したかずらを束ねて山中から麓に下ります。採取場所は大型車が入れないので、軽トラックで何往復もして運び出します。



3 古橋落とし

3年の時を経て古くなったかずらを手作業で取り外し、ワイヤーと木だけの状態にします。



4 かずらを蒸す

生のかずらは固いので、編みやすいように蒸気で蒸してやわらかくします。

5 雲網の架け替え

橋の揺れを抑える雲網を両岸の杉の大木に2本ずつくりつけます。雲網は、数本のかずらをより合わせてつくります。



6 壁網張り

橋の欄干になる「うわでとり」と「なかでとり」のワイヤーに新しいかずらを巻きつけ、両岸に立てた「とり木」に結び付けます。



7 壁もつ

うわでとりとなかでとりを橋床になる「さな木」に固定します。



8 さな木編み

さな木に細いかずらを巻きつけ、しっかり固定します。





「祖谷のかずら橋」は、古来、祖谷地方に13か所あったと伝えられており、その中で唯一残されていたのがこの地に架かっていたかずら橋。1923（大正12）年に、重末小学校の廃校により今久保、中尾、閉定の3地区の子どもたちが善徳小学校へ通うこととなったため、児童の安全通学路として板橋を使用することになったことから、かずら橋が消失されたと記録に残されています。

かずら橋をこれからも守っていくために

～三好市・徳島森林管理署・香川大学農学部が協定～

かずらの資源確保に向けて

3年に1度架け替えが行われるかずら橋では、架け替えの資材として丈夫で腐りにくいシラクチカズラが使われますが、山間部に自生しているため、資材確保が課題になっています。こうしたことから、三好市と徳島森林管理署は、平成20年から、シラクチカズラの資源確保のため、国有林を活用して、シラクチカズラの苗木を植栽して栽培試験などを行ってきましたが、活着率が低いなどの課題を抱えていました。

このため今回、つる性植物の増殖や育成に専門的な知見を有する香川大学農学部と徳島森林管理署および三好市が2月23日、「シラクチカズラの資源確保と活用を推進するための連携・協力協定」を締結しました。

締結後、四国森林管理局徳島森林管理署長の多田弘之さんからは「今後、我々の国有林を活用していただきながら3者連携を通じて確実に資材を提供していきたい」と述べ、香川大学農学部長の深井誠一さんは「シラクチカズラを通じて文化財の保存や将来の世代にかずら橋を受け渡していく事業に参加できることは大きな喜びです。また、シラクチカズラはかずらとしてだけでなく、果実の生産にも大きな可能性を秘めた貴重な植物資源です。シラクチカズラを通じて、地域の皆さまと交流していきたい」と語ってくれました。

今後、シラクチカズラの資源確保や資源調査、果実の活用を推進し、かずら橋を通じた地域社会の活性化に向け取り組んでいきます。



3世代で渡る

～過去から未来へ～

3世代で踏みしめたかずら橋

2月23日に行われた渡り初めでは、東祖谷在住の采本さんご一家が晴れ着姿で先頭を渡られました。親世代の采本清重さんは、「かずら橋は身近な存在すぎて、滅多に渡る機会はなかった。今日、初めて家族で渡ることができ、人生最高の日となりました。これからも海外の方にかずら橋をはじめ、祖谷や日本の文化の魅力を伝えていきたい」と話されました。

「子どもの頃に、地元の人たちが山の中からかずらを取ってきて、肩に担いで運び出している姿を今でも覚えています」とかずら橋の思い出を語ってくれた子世代の耕介さん。

孫世代の直己さんは、「今回、親から小さいときに渡ったことを聞かされました。妻は、今回初めて渡る機会でしたが、心地よい揺れを感じながら手をつないで渡れたので、とてもいい経験になりました」とそれぞれの思い出を振り返りながらかずら橋を渡っていました。

外国人観光客の増加 ～海外の目から見た祖谷の魅力～

五感で楽しむ観光客。年々、増加している外国人観光客。かずら橋架け替え中には、かずら橋料金所スタッフが、無料見学ガイドとしてかずら橋の由来や架け替え手順などを説明していました。

1月16日に、台湾から社員旅行で訪れた劉徳慶社長は、「12年前に四国を訪れたことはあったが、三好市は初めて来ました。自分の地元にも似た風景はありますが、祖谷は自然が豊かで景色がとても素晴らしい」と笑顔で語ってくれました。また、添乗員のチン・イン・ユーさんは、月に2回台湾の方を連れて祖谷を案内しているそうですが、「景色も喜ばれますが、祖谷の伝統料理であるごまわしやあめごの塩焼きなどがすごく人気です」と外国人観光客の方は五感で祖谷の魅力を感じているそうです。



伝統の技を受け継ぐ ～かずら橋保勝会の皆さんによる架け替え作業～

先祖代々の貴重な財産を次世代へつないでいきたい

竣工を祝い行われた祝賀式では、架け替えに際し材料の採取から架設に至るまで豊富な経験と伝統技法を用い完成に寄与した「かずら橋保勝会」の藤原啓二会長に黒川市長から感謝状が手渡されました。

架け替えを終えた藤原さんは「作業にあたった会員のメンバーは8人。今回で4回目の架け替え作業に携わっています。危険を伴う作業。かずらを採取するたびに、質や大きさ形が違うので同じものは2度とできません。これからは先祖代々の貴重な財産を若手にしっかりと引き継ぎながら守っていききたい」と語ってくれました。

また、今回初めて作業に加わった古井剛士さんは、「3年前は怪我をしていて参加できず今回やっと携わることができました。簡単に思っていた作業も実際やってみると大変難しく先人の知恵に驚きました。これからも地元の誇りかずら橋を後世につなげていく力になりたいと思います」と力強く語ってくれました。

かずら橋を後世へ ～西祖谷地区の児童・生徒らが苗木作り～



20年後のかずら橋に思いを込めて

かずら橋の材料となるシラクチカズラの苗木作り体験が毎年行われています。昨年は、7月19日にふれあい公園で行われ、西祖谷中学校の生徒16名と樺生小学校・吾橋小学校の1・2年生4名が参加。祖谷のかずら橋架け替え資材確保実行委員会のメンバーに教わりながら、20坪にカットした約300本のさし木の先端に発根促進剤を塗り、プランターに植えました。苗木は根が出たら1本ずつ鉢に植え替え、5年後には東祖谷の国有林に植え替えられ約20年後にかずら橋の材料として活用される予定です。苗木体験し、架け替えられたかずら橋を渡った吾橋小学校2年の平石悠真さんは、「自分が育てたかずらが使われたら20年後にまた渡ってみたい」と目を輝かせていました。

